



俳諧御傘  
上

5  
911  
1



911  
1  
5  
911  
1-3



龍鶴法集

序



對梅字  
藏原乙彦  
藏于俳書  
二百精舍



龍鶴法集の序  
小春のころに  
よりいへば  
じ道るれ  
乃と  
る所を  
龍鶴法集  
とま  
ふ道

評

あさひのあ〜ん

二系級の筑波集宗後法

那新筑波をわ〜め

と早下〜め

筑波と連款を〜

大慈多大揚大補人のあ〜

一連款を〜

〜のあ〜

連款と連款の〜

〜のあ〜

同の〜

〜のあ〜

白と連款と〜

〜のあ〜

お〜

〜のあ〜

名が〜

〜のあ〜

小入給ふ〜

〜のあ〜

〜のあ〜

〜のあ〜

〜のあ〜

〜のあ〜

高よの所へはむとてしるも  
 ありてはむとてしるも  
 とてしるもとてしるも  
 してしるもとてしるも  
 波とてしるもとてしるも  
 去来しるもとてしるも  
 けい帖をあらとてしるも  
 述べしるもとてしるも  
 久留の事書はるも  
 かなよとてしるも  
 と梅乃木の事とてしるも  
 ふへられたる事とてしるも

徳安かん

新式をあらとてしるも  
 とてしるもとてしるも  
 物とてしるもとてしるも  
 乃とてしるもとてしるも  
 とてしるもとてしるも  
 とてしるもとてしるも  
 とてしるもとてしるも  
 とてしるもとてしるも  
 とてしるもとてしるも  
 とてしるもとてしるも  
 とてしるもとてしるも



らんおんかむまよ一圖に  
可しと變給んかり清君字  
えあむおんまよのたう  
かむおんかむおんかむ  
おんかむおんかむおん  
かむおんかむおんかむ  
おんかむおんかむおん  
おんかむおんかむおん  
おんかむおんかむおん  
おんかむおんかむおん

能譜法傘

伊

あへ

連ふ一燈一句乃  
物るれと能よま

二あるまを〜發り〜む  
大古上古中古能古古代古  
今集まよの句も二句若  
肉とあま〜とあ〜へ〜ま  
ふよ通とあ〜と古能古人  
古より古も古能古能古の  
類いあ〜今よあ〜あ〜あ  
次之句ま〜む〜ふ〜二句  
ま〜あ〜あ〜今よあ〜あ古  
上る乃古のま〜と古能古人

乃新のゆき類と云む古乃  
 字の間と云ふ字をくなく  
 乃分て云ふ婦へ一問云古と  
 集乃古の字を云ふのあへ  
 かうせ古の古れ字をも  
 ゆきまのゆきと云ふはゆ  
 乃くゆりぬをや言ふ古今  
 の二字の後成つては集れ得  
 古時其後乃のあへ今れこ  
 との葉をとりて終ふゆ  
 古のあへ今もあへ  
 乃のあへこと云へ法よな  
 し唯今やよきあはる  
 亦ふ量乃古乃字付  
 乃事あるべし格  
 をとつて終ふあへ  
 乃のあへをゆきと云れ  
 と誰よの面をゆきと云

**局**

いやきいありき此のい  
 二もありありと二つを  
 多るるす可誰よのあへ  
 局はす局をとりて終ふ  
 いひく今をあへる

**儀**

二つ今一名はよあるる

**池**

池二名はよ一と二あり  
 池あると云ふは池  
 池三句乃内と喜熱池功  
 池あると云ふは池  
 乃池一乃内と池乃尼塔池乃

僧正なる人君の名を小あ  
ひのあつてもうし水色は  
もふもふ人倫に比三句  
乃あ

命

命を中乃家なる人の  
一辨に六美命と名づる  
命を中乃家なる人の  
人君命の二名用ひ命に玉  
乃法相を智とて忠乃家  
は玉乃を二句とて又忠の家  
を中乃無乃玉の法多々  
と命に連懐するなりわ

稲葉

稲葉なる人君の  
い糸よの二句とて稲葉の  
のよなるを稲葉とて稲

三乃糸の二句とて稲葉の  
る二句電乃字よの二句  
小の糸二句とて稲葉あり  
い糸光なるを稲葉とて又  
い糸山稲田稲葉なるの  
稲葉なる二句とて稲葉  
を中乃又二句とて稲葉の  
句も稲葉乃稲葉の二句  
も二句とて稲葉乃内よ  
稲葉も同稲葉の二句  
稲葉稲葉とて二句とて  
も二句とて稲葉の二句  
三乃内よの二句とて稲  
乃字よの二句とて稲葉  
く去稲葉の二句



伊勢乃神 とらふと名ふ  
とらふと名ふ照

神といひくは名ふは也と  
名神名はよ也とくは比類  
るりくと喜き物なりおきり  
あまのあやまわこ名はよあ  
とたよあ一伊勢の神と  
そわもそら神と文一初なる  
るくも入一能治りも天  
照神とわくもそらや天照  
右神といふ入く守とあらと  
は入く一伊勢とらふ國乃名  
のわくも初なるくつを初終  
又人老る名の伊勢もつせの初  
つを海もつせのつせの天目  
乃終乃初おらりよ今も  
乃外も入く守

いほこのち もくも  
もくも守り

な入く一伊勢乃神院とら  
も入く一伊勢乃神院とら  
ちと入く一伊勢乃神院のつ  
このちとあつはもも神院  
伊勢乃神院とらも神院  
も入くこのちと禱るなり  
いせと伊勢乃神院と海とれぬ  
お入く一伊勢乃神院とら  
伊勢乃神院のつこのちとびお  
り初なるくも伊勢乃神院  
と初なる禱るくわつりお今一  
もくも伊勢乃神院と伊勢乃



石乃乃敷ハ岩三乃内らり

第のクハ岩岩多ク岩多ク行

ハ面三乃乃あしこれくも岩よ

ハ面多ク人石よ七句七句後よ

と二句多ク第少めくも岩を

あてしこまら海くこの岩

よをらく人岩岩の岩子代

おいしこの岩と岩く次舟

も同あ石屏も石二乃内こ

石行石二乃乃あしこれくも石

よ六面をく人岩よ七句多ク

一物よ八二句多ク石南は同

あ業乃ク名岩徳石を水石

岩東石亦皆石二乃内らり

石も人石二乃亦らり石を

あはら石を人岩よ六面を

あしこりあよ八二句こ岩屋を

岩三乃乃あし但岩よ八行を

こくうい石よ六面をくあを

活あよ二句屋乃字よりしと

三句こま後白物ハ岩石亦

り七句多しいしうあハ居前

小あし付但句律よらる人

岩本ハ人岩よよあく人く

もあく身極細く第おハ二句

先石清水岩乃く海くあま

おら清あし石乃字とあま

ていし水清く加よ石亦を

物をまきしりし面くくりし

嶺こ石清あハ先ハ八幡乃流

もまふはあもたふあく  
色一燈一白に清あると計ふ  
物をくく今一白も清水  
ハ清中とふはまし何もなま  
わく寸岩橋あまもあふ  
石の字はあくもいし橋と  
清と連ふ清橋よのり橋と  
り乃ののまし岩橋乃付ら  
石乃字をくぬ物とあはれ  
執事乃古字といし橋一わ  
といし橋あまくく次岩橋と  
山敷りわく寸あまらる  
らこの岩く山敷と水也  
よあく次岩あくあく  
も岩三乃肉と神祇と非  
也舟乃まよハ白雲の  
わすの岩く清あまらるも  
わすの事

放生

いけりせまろ

放生 八幡乃糸と林と放生  
川あくまらぬり水もさるわ  
生敷り二白橋と生敷りま  
はとふ白放生舎乃あまら  
らと物をくくも放生舎  
とも放生川ともまらる寸  
と一放生舎とらふあ  
と物をくくあまらる  
物をさる川とらふあ  
る一連の二白乃物をハ離  
二白も物とらるわゆる  
不覚乃遊橋乃あまらる  
乃を事とふ二白もらる

とんハ後すし一三事之此准之  
致生川とらうわの北林非野  
とあふ名取うとく生執よ  
もさうと母るううす

家風

乞い家々の不化の伏  
く情も伝るゆかりよ  
とり海々の風よあゆむと  
と禮し居るよ二句風神よ  
も二句まて風神とP風  
未枯野まふあ風と云字よ  
ハ三句まて家々のま字よりハ  
面を境ふし

家

連よま云うくく四句の極  
物よ一三事と離れハ整  
みよるんくとも所句ももろ物  
されし面をうくく空入句ま  
と知る

家

とや々の事一居  
一三二句まらう  
と産とらあまわれは家又  
乃内く

家とお家

又家と家とらあ  
字よハ面を境ふ  
くお家と後よ漢句わしと  
もくくや家をせわらうくく句  
ハま久くく使お家とらあ物  
し居るよ境くく

いふのみのみ

又天現  
屋相余  
何もま目日相乃ま相乃  
内乃まら

入ね

乃字あまの字二句

夕阿かゝるいなり乃字  
乃字乃字より一疊より

いし

二行をふるう一  
こいしらとつひく

一掃くまをさすこいし七句

まを祀よいしこいしりひ

連の内今一そへあまと又白

乃物と次いしこいしつら

りまよるを祀といふい

いんらんそまひひく

皆二句まをひひくとして

何と何あそとあそこの類の

なまそこ又いしといふらん

とるいし連なり相をぬ

いし

一句乃物と祀一

二句と一そま

くけたるにたをぬ乃字の物  
り二句ま

いし

あまの字のあま

とどろけ乃白あいうせん

とあまの字乃物こいし

百約よ一志物と祀よ

乃白あけを祀と二ま

一乃白中よあまをう

連方よりもまを祀よ

も今一乃白一乃白の物

誰よあめけをくくくいつく  
きんをくくくせうあめけ  
二句もくくく一連も中乃  
句くく今一もまのいほま  
わをくくくくくくくく  
いふきんいつくせんいつく  
誰よあめけわうくくくく  
あく守連よくくくく  
乃あめけくくくくくく  
里のあめけくくく二のれ  
誰くくくくくくくく  
わをくくくくくくくく  
くく

いく 案乃字をまぐく  
くくくくくくく

打鐵をくくく

いづり 日次乃日く二句ま  
くくく月日れまく

きくくく

いづり 連よあめけ  
誰くくく三句ま

偽よ偽く 二句まく連  
偽く一連一旬あり

いづりくも二句乃肉く  
わをくくく

生死よ 命二句ま  
いづりくくく

詞をくくくくく  
もあめけくくく  
くくくくくくく

三羽も二百まで

いくらから海まで 二百まで

三羽も二百まで

指書

新し新しと天像よ

不極極極... 天像よ... 指書... 天像よ... 指書...

天像よ... 指書... 天像よ... 指書...

天像よ... 指書... 天像よ... 指書...

天像よ... 指書... 天像よ... 指書...

天像よ... 指書... 天像よ... 指書...

天像よ... 指書... 天像よ... 指書...

天像よ... 指書... 天像よ... 指書...

天像よ... 指書... 天像よ... 指書...

天像よ... 指書... 天像よ... 指書...

天像よ... 指書... 天像よ... 指書...

天像よ... 指書... 天像よ... 指書...

天像よ... 指書... 天像よ... 指書...



植物よのわく寸まき山室乃  
くわ衣も生敷よわく寸まき  
くくく式目をちんごもの  
まき物をもくんと繪あり  
草よ乃下にまき紙をのわ  
よ植物よ二句端しりあ尻  
ま尻う人物しりあ寸とま  
まきしりて又衣裳乃草よ  
乃下よまきをまのわ  
二句端あるくくく寸まき  
首尾お透きりあま<sup>うん</sup>山の  
私よまきくくく尻世昌<sup>あつ</sup>叱  
乃まきしりあるくくく  
まきまき通宗春句しり  
うらあくくくまきまき  
くくくくくくくくくく  
新式をくくくくくくく  
まき二句端しりあ尻<sup>あつ</sup>に  
植物よまきしりあまき  
物しりあ尻しりあ尻<sup>あつ</sup>に  
乃まきまきまき植物よ  
あまきまきまきまき  
植物よまきまきまき  
あまきまきまきまき  
のわくまきまき乃わ尻り  
あまきまきまきまき  
まきまきまきまき  
まきまきまきまき  
まきまきまきまき  
まきまきまきまき  
まきまきまきまき

し居前より今婦人より寸時  
物より今婦人より寸時  
いひしより寸時より寸時  
白神より寸時より寸時  
里端の整袖より一寸采めして  
不正の端より寸時より寸時  
多めの法度より寸時より寸時  
三人のおあより寸時より寸時  
はうより寸時より寸時  
よ叶より寸時より寸時

**福送**

福送は送を志すこと  
福乃面平  
三句のむしり乃肉と又福乃  
ありしより寸時より寸時

蓮川より寸時より寸時  
柳のより寸時より寸時  
らし福より寸時より寸時  
田舎をより寸時より寸時  
一より寸時より寸時  
おより寸時より寸時  
君より寸時より寸時  
福送より寸時より寸時  
福小成より寸時より寸時  
いより寸時より寸時  
事より寸時より寸時  
いより寸時より寸時

西をよめは漁舟は漁舟と作まり  
いさわたりとくわをくく  
漁火もくくくくくくくくく  
色もくくくくくくくくく  
あくくくくくくくくく  
いふよあけくくくくくくく  
とまいたれと海人不討

いふ言 秋と冬とくくくくくくく

いとまじ 初稚くくくく

けくくくくくくくく

いとけ いふくけな

たりわたりと乃字付白

大 唐大とくくくく

今一多入くくく海大も二君  
内と日とるん乃成のわをく  
今一多入くくく

衣裳とくくく

いと 秋 秋後之秋奈乃

と あうく松竹都と

あさ日 初時とくくく

と 初時とくくく

く

いと 昔の事歎くくく

哲系とあしはるは哲系  
作もつらふはあつらふ  
もつら哲系とあしはる  
あつらふ

道田とあしはるは  
又森のうらた

隠毛とあしはるは  
玄徳とあしはるは

泉  
泉國の非あつらふ  
あつらふ

乃とあしはるは  
あつらふ

色  
あつらふ

あつらふ  
あつらふ

山のあつらふ  
あつらふ

乃とあしはるは  
あつらふ

板間  
あつらふ

市  
あつらふ

あつらふ  
あつらふ

あつらふ  
あつらふ



儀榮

ほむえくほむえ  
ほむえくほむえ

稲の象

三月二十一日

象友

象も象も象も

語

梅 吾前之連よ一乃物され  
と誰よいぬき然りく

今一わろく

新

因乃新吾前之因と  
新入をいへく

百官は因新目とらひおと  
ほりさし存友人し新也

新吾とらぬ相ハ二又あは  
一ハ新え乃事し今ハ新  
人さし新も春はま

て新わらとらぬ相しあま  
因ハいけくもく新ハか  
もと春新とらぬ相いさし

小七日ニつらぬと新らる  
かわもおも因ハ不極  
新乃字と積よらわあも

とらぬ相とらぬ相とらぬ相  
とらぬ相とらぬ相とらぬ相  
とらぬ相とらぬ相とらぬ相

新吾のつこふも新とら  
いけく相とらぬ相とらぬ相  
新のつらぬ相とらぬ相

新のつらぬ相とらぬ相  
新のつらぬ相とらぬ相

葉

極こた 秋と連なり一層二句を  
まてし能く二句を介し

上句下句とぬき成りへあ  
とも不審然る風色甚ぬ  
紅葉とよの文字をたの句に  
わたりし後乃句よの句の句  
不事なるれ

まのゆき 連なりぬき乃言今二

まぬ まぬ 二能治よのまぬ村

ぬこまめわくらふれをくく  
さめと二あるやとある介

まぬ まぬ 今一れをくく

ま乃さゆらもび二乃肉と  
まぬ まぬ 二又ま乃風との字

ま風 ま風 二又ま乃風との字

を入くくも二句乃中とわ  
能乃字を介し二の  
まのの字を介し二句の  
まぬ まぬ 二ま乃風を介し  
て一と二句を介し  
まぬ まぬ 二ま乃風を介し  
二句を介し

い

上句下句各二行  
鶴上上句下句

いほまあくも今一くく  
上上句と人一と海りの  
事し

去月

一三日月  
一初式より此あつく

多きく一産と句乃らあめ  
能く大勝月去月とて終る  
清く今一く久一産田句  
たわ友多く同分秋月と  
八おとくくさうくさくさ  
く作しうく一休只今まに  
汝法と作い去友多く此月  
乃事し初式をくく見今け  
ぬ人さあまはよ三月月

さあわくす連すも一産  
三日月一三日月二と空す  
あわ能く能乃と日月ま  
るく此のまの三ヶ月今一  
あさくま明きるく出場よ  
地乃まこれ明今二あるこ  
それも能乃ま明二かう  
さくわ地乃ま乃在明二ハ  
あさくま一旬成る

去と春

あさくま同去能  
鶴ハ和漢乃あつく

去端と云くよ何とく同去  
る七句ハ端終るぬさや  
も不私去首法平結也法  
端さくこの能鶴よまをさ



句云小なる花とて実なるは  
多きものりけりよま年宗祇  
乃独奔の能治をせん約事  
と治ふ句云わくくまらり  
先陣もあられきう結しも定  
ては取あぐわの治るやせ  
いふ結結りあられ行

花

一庭句の物なれ能治  
りハ又句と人さるるれ  
花能もも田句と治こま能  
和漢りも田句るれしくあ  
あく云端の大法能治と  
和漢よ准と治能云能治  
る花治能治るる結なり  
いひく花と面をくく今  
と人さるるわと人さるる  
正花のまらし花乃句は  
結よさるる花わら結よ  
うとあつ句も花田の面  
なり

花小橋ハ

付ゆきされと  
あつ句の正花橋  
めさあつ句神さうの同  
り成る正句よ橋り花  
をいさうつ句へう次連  
まハ橋と花と面をさう  
能治ハ七句通る

花おま

正花るれ中も  
難し  
花乃中  
正句し極和ら  
候り物し花  
中う正句お和乃西う入

あり花を雪と見たりも  
雲を花と見たりも  
花乃中よりふよふ葉極物  
とひこ物あるふ極物を  
るれし花も新式のと  
く用と

花乃澱

正死し新式のと  
く極物よ三句山

数ある由も三句極物  
たわ新式よふ極物  
ををを云物よ花乃ら  
神を以ても極物のこ  
ららわらるるふふ交神  
況ものこちりも又わ  
たは養らわらるるに  
花乃雪も花乃雪よ似

花乃雪よ似るものこ  
ららわらるるふふ交神  
況ものこちりも又わ  
たは養らわらるるに  
花乃雪も花乃雪よ似  
水邊よ極まのこ  
外を思ふたの況も新式  
混合とふ物あるふ極物  
場よ不混合ものなを  
花乃雪よ極まのこ  
外を思ふたの況も新式  
混合とふ物あるふ極物  
場よ不混合ものなを  
花乃雪よ極まのこ  
外を思ふたの況も新式  
混合とふ物あるふ極物  
場よ不混合ものなを



二つり一ふめんぬうと数よ  
うくわい一あらし

ま乃日 とつふにまうさふ  
あらしもまわら

あらし  
あま日をもて交日と今う  
と

揚娘 娘人揚非許哉  
也しるふ知しう治子

うさうらあし娘三乃因し

花を結ふ白に 野山と旁  
ふとひ

ても娘よあふたふひ孫  
とふ字入ともう寸地  
ふひあふ花をさるる神  
らうとも孫

花 あまの娘中三まてい  
る今一甲白あより面八白

乃るよふとあ事し又物行  
の基下白あともく  
く寸又独吟るれし十之  
白め定<sup>さや</sup>登<sup>たか</sup>うくく屋<sup>や</sup>孫<sup>ま</sup>花  
あまの娘中三乃外八白名  
因<sup>よ</sup>あ事<sup>さ</sup>とつふは<sup>は</sup>あま  
まい<sup>ま</sup>は<sup>ま</sup>あ<sup>ま</sup>も<sup>も</sup>く<sup>く</sup>ら<sup>ら</sup>

花 とつふもい花  
あらし

花乃ちらに 梅乃ちらに  
を梅能ら

梅梅紅葉末葉末乃ちら  
ハ面を梅ふ平流<sup>りゅう</sup>雲<sup>うみ</sup>あらし

ちるのちるを

花乃ちるに

美乃花つる  
日影

月さとのちつるに花つる  
ふし

花乃ちるにけの影も

花乃ちるにけの影も  
もろの陰乃字の漢  
花影まじり

花のあま

まじり植物の風  
神とあり物よ

あま

花乃部

正花の極相なり  
連なり

中花の部

中花の部  
花の部  
花の部

花の部  
花の部  
花の部

花の部  
花の部  
花の部

花の部  
花の部  
花の部

あま

花乃

花乃  
花乃

乃一花しるまわるとは洞  
正花も多し一但に依り  
しつり花やつとつ洞の  
さつりやう形式よあけま  
とさうつと一筆の鏡のこ  
とくされし正花より一筆  
しつりまよりの植物よ二句  
場へさつしつりつとつ洞  
いさつりつとつ洞つとつ  
正花よの成りつとつ洞  
と花つとつ洞つとつ洞  
いさつりつとつ洞つとつ洞  
ふも一筆つりつとつ洞  
字あれし正花乃字よ二句  
まじつとつ洞つとつ洞  
花乃字よりつとつ洞  
は二乃洞の難しつとつ洞  
左形式の心花乃字一  
てまよ可洞つとつ洞  
依りつとつ洞つとつ洞  
あまの正花乃字  
つとつ洞つとつ洞

しつりつとつ洞

菊乃花乃数よ二句  
植物より二句  
も成る

花のしつり

乃花乃しつりつとつ洞  
しつりつとつ洞つとつ洞  
あまの正花乃字  
正花つとつ洞つとつ洞  
つとつ洞つとつ洞







なまは事もはの乃事  
されしせんはくむつう  
正花よあるうへいまの極  
物よ二白くあへ

正乃知りし

正花よ如く極物  
よあり寸又あへ

衣敷よりら織をよ極るわ  
花乃字よい三白まのあ成  
くはくわ物るわ

花露

正花の極物よま  
糸の湯の花入よ

えあり又滑乃極をよ  
それも時々の字よ乃花  
をまのうへあよ筆電のり  
はをまのうも極物よも用り  
正花よよりく尺あへ

花くるん回あ

花四

正花の極物よ  
尺あへ花四よ極分

るく寸花露よあへ  
その尺あへ花あへ  
花時 正花の極物よ  
極るく白く正花

花堂

正花とまの堂と  
くわりの花の極物

よ二白まの正花乃字より  
ままの三白まの正花乃字  
くいあれまの三白まの正花  
そのまのあもあわの極  
正花乃も極物よも  
まのくあも乃花堂

の菴花と云く花堂院の  
難と極難よもあつた  
ゆふの正名よ成へ  
非若不地入編

花車 正花と云く正見車  
乃るなり

花軍 正花と云く正見  
家と揚貴地と云

お花あつたわひあつた  
終つたなり

花山 名は正名よこの名  
あつたなり

正名と云く正見  
正名と云く正見

正名と云く正見  
正名と云く正見

正名と云く正見  
正名と云く正見

正名と云く正見  
正名と云く正見

正名と云く正見  
正名と云く正見

正名と云く正見  
正名と云く正見

正名と云く正見  
正名と云く正見

正名と云く正見  
正名と云く正見

正名と云く正見  
正名と云く正見

正名と云く正見  
正名と云く正見

非名は難し

花の音

袖乃音人かきよ  
連ふよのちを極

誰れよの面を極へ

花の匂

とらふよ袖乃香う  
けり音人かきよ

誰れよの七白まへ

花の味

信ふ乃極あはれ  
まろくしとめ

遠乃町ちくさ極とつ又

正月春餅よ麦花ひくと

てありあましきまよ

極し正花よも成し信れり

けの正むよのれたまへ

知れりくく白神よ  
よふ人まよ又その部のさう

花小者野はらつる極

より野よ花の不若花よ

多野紅葉よ新田月

よ又級回を同云不乃花

を対う同云あらし候

鯉子に乃極よ射よとと

付まよきこや音云よと

能不審しび事ハ新式よ

ものさけいは建の宗匠の

云ともさうのとも極う

のありびうりめ成なる人

のおそくく移成る共

る細よと長くしとれと

あろくはよあはよあけら

遠よ若野紅葉よ五月

子姨捨毛糸くろりをを流き  
ぬとわの終へくはかひ付  
合よぬもくろりかろ寸若  
しつらゝいふかひるみあう  
白山とつよの雪を成けく  
と雪くし白山をまもけり  
ぬとゆい雪乃くぬあう  
富士の雪よけくも雪成  
けくもくゆいし寸若  
おあく自余れりまを別  
ろくへ

花子れね玄

花に難く  
人偏

花田

正花よあし寸若草  
乃らるあくそあう  
を花田又とりわされと急

花田乃帯しあくとまにいさう  
物られも林くいさうあ  
難し極物くも夜敷くも

餅花

正花しあくと極物よ  
二百し

花あ花新

花に難く  
正花と物

人偏し極物よ極とまふ花と

花のさき

正花を物くま  
くあは極

物くあは極

とわく

正花乃字く  
あは極物よも

きくくは極花乃字く  
あは極物くくま

正花うもぬへく極細う  
も二白まへ

しる皮 うん 花乃字よ世と  
るれ鼻よあふ  
皮し

花入花純 ひ 正花を指し  
乃具の名れ

花主太黒 つが 花乃繪あつ流  
かをりあとり

あつら繪よくくまよ唯  
て極細うらうすまぬま

花うらう上の極細うも二白  
は入る極細うは乃を

あつら極細うの極へりうす  
花うの 難く正むりも  
と極しうへの

おあうす  
花下子 ち 正花まよわ  
す花といまわれ

とも極細うよわもさうう  
茶のし如音 茶よも花し  
うけ左そ花と

いしうすも茶のうこの花  
やうたう紙のゆへよ正花を

もわしう極細う難く極細う  
まきうす

花笑 い 花乃あなりり  
笑し正むし

極細う

とくしひらむ 正花を物と  
まじあらん

植物よあり次新ふし

死火 正花を物とまじり  
他と器の雨と新ふし

植物よきううまふ

死うつを 正花を物とまじり  
あふ寸生新ふし

あふ寸うへものよ新ふし

死つと死 正花し雜し植物  
小二白まへし

繪ふある花 正花と物と  
植物のりし

あふ寸まじ

死あふ まじ植物し正花  
たふ

死のり 條乃事し雜し  
正花を物と物と

植物よあり寸

死 小鼓よあり正花よ  
まじれしままひりし

正植物よあり寸

死をゆ 正花し植物  
はひり

種乃むをいり

まじり

まじり

正花よあり寸

正植物し二白し人

ひまふたふみ







移し船とてふし本志為  
葉の及し松竹の杉ら葉の  
難しそれと及し葉の及し  
移し葉乃及し葉と句と  
今

ま乃乃

ま乃乃乃事し  
ま乃乃乃事し

ま乃乃乃事し  
ま乃乃乃事し

船

只一名は一船一船一船  
次及乃船船とあれし  
やまぬれり事船とこの  
は船船と一船船と  
又鳥船船通天船と及

連のあゝの船の船と二白  
を移しし船の船と二白  
船の二もと船の船と  
り同一名の船も同と  
船と船船下と同と船船  
も船の船乃船とあり船  
船よりそれし名乃船船  
し船と船とくも船船  
も船船とれし名乃船  
今有は船と各別と  
ま乃乃乃乃乃乃乃乃  
ま乃乃乃乃乃乃乃乃  
乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
のうらにあれし船と  
る乃乃乃乃乃乃乃乃  
ま乃乃乃乃乃乃乃乃

田代

漢底 いし 今今三句まじ

只一急一離うら

いふ今一まじ

山よまじ山影

山よまじ山影

山よまじ山影

山よまじ山影

山よまじ山影

山よまじ山影

山よまじ山影

山よまじ山影

山よまじ山影

山よまじ山影

山よまじ山影

山よまじ山影

山よまじ山影

山よまじ山影

山よまじ山影

山よまじ山影

芭蕉

物と連一三句の物

物と連一三句の物

物と連一三句の物

物と連一三句の物

物と連一三句の物

物と連一三句の物

物と連一三句の物

物と連一三句の物

物と連一三句の物

物と連一三句の物

物と連一三句の物

物と連一三句の物

ろのいゝる紙蓋乃重靈乃  
箸をさしりくしつとわら  
おとしにちちちしつとわら  
とつりしつとわら  
よわ初をさしりくしつとわら  
初をさしりくしつとわら

初嵐 物こころのせの難し

初嵐 秋は使ふ正月の死靈  
八月十八日秋は風波を

初嵐 初は使ふ正月の死靈  
八月十八日秋は風波を

初嵐 初は使ふ正月の死靈  
八月十八日秋は風波を

初嵐 初は使ふ正月の死靈  
八月十八日秋は風波を

とらふ挿藤乃原まゝこのまぢ  
有りきればも白挿おしりく  
ぬもく挿しりか居りく次  
挿藤乃原まゝかゝるれこ  
とる終るも初んといさあし  
ぬらぬもあつ人を付さる人  
くく挿し終るもさく割とる  
も無益のりり次挿藤の原よ  
燈のまぢ挿と汁は燈をま  
くく挿し終るもさく割とる  
野ねん挿し終るもさく割とる  
さくぬも同さくまゝあしり  
付さくさくさくさくさく  
はあし挿し終るもさく割とる  
乃挿やまゝ挿し終るもさく

蓮

小挿くも同か後葉  
も同か大液の芙蓉さる  
同か蓮の葉も同か秋と  
り人ありも同か余の葉  
さるのまじりりく花とさる  
蓮の葉を結ぶものも又蓮  
肉と名付くも葉種りり  
さるさるさるさるさる  
さるさるさるさるさる  
さるさるさるさるさる  
さるさるさるさるさる  
さるさるさるさるさる  
乃名よる蓮乃まゝも難や

名所の蓮花燈と云れ名乃  
相府蓮花之蓮花王臺の  
りぬと回おもとら次と一とく  
きんきとら高葉とら又と  
まへ一極とのりあぬぬ  
名人名君とらひあり一  
まへと極極ふあつ次と  
きんきと二と次と一と  
と身よちるうと二と乃  
極なり

瑞山えやま 山乃瑞花を極全

新瑞あかしと極とらと母と極  
新式あかしよらと極とら  
とらと極とらと極とら  
とらと極とらと極とら

山乃の瑞花の極とらと極とら  
とらと極とらと極とら  
とらと極とらと極とら  
とらと極とらと極とら  
とらと極とらと極とら

柱しら 新式一居家の極とらと極とら

今連よ居家と極とらと極とら  
あ極立家居と極とらと極とら  
とらと極とらと極とら  
とらと極とらと極とら  
とらと極とらと極とら

瑞居うわ 居家と二とら

とらと極とらと極とら  
とらと極とらと極とら

うす

うすり 4より のさり

ゆさう あまのりーすーむ  
きーるん次

うすり 連は二句かゝれし  
離は二句もあへ

うすりも回あ

うすりあ ちと連は二句  
もこり離は

うすりあへーあよて替は  
うすりあへーあよて替は

うすりあへーあよて替は  
うすりあへーあよて替は

うすりあへーあよて替は  
うすりあへーあよて替は

うすり 結巴文西月雲と  
あへてあへてあへて

うすりあへてあへてあへて  
うすりあへてあへてあへて

うすりあへてあへてあへて  
うすりあへてあへてあへて

謀 ちと連は二句  
あへてあへてあへて

うすりあへてあへてあへて  
うすりあへてあへてあへて

うすりあへてあへてあへて  
うすりあへてあへてあへて

うすりあへてあへてあへて  
うすりあへてあへてあへて

うすりあへてあへてあへて  
うすりあへてあへてあへて



般若の字し又きへもれ取  
うく風神よ二句吹乃字より  
二句まきももの取吹るもく取  
とらふまよもく離よ取の字  
三ありも取も取お取おま  
生敷らぬ取へは命りも亦  
もへくは取取の字もあ  
るこそ取られたる面をいへ極然  
るるるのめを  
**取赤贖** 元日小あるるる  
肥後国字も赤  
長漢らるるあくはははる取と  
取赤らるる系めの時時  
らるるらるる取合になら  
るるへ取取らるるらるる  
初也 まきえ日に約乃小ハ

約何らるるも取らるる取乃  
別鳴初りもく取乃別ら  
焼られく取らるる取の  
るり

らるる

花あらぬらるる

花あらぬらるる  
らるる

らるる

長とらるるら  
らるる

よあらるるやあらるるらるる  
まみなり



藤の戸蘇友

ふし 藤原

わりの藤を極くまはる

漢秋

まはるのふしを藤と云ふ

もろし

柞

柞はちりも柞は柞山柞

その柞もふたふたをうへに候

成なり

初

初はちりも柞を結くも

初

柞はちりも柞

たふしの例は成くは事

わりの一と一糸院乃時

初

初

初

仁

仁

仁はちりも柞

乃

乃くくつと云ふ事し皆朽を  
習へく庭のなまへ各あ  
と新武よあれた庭之乃  
外庭のなまへ庭刑乃  
増長其今一朽をくく  
し是ハ庭刑くあへん  
白皇若乃庭も右取をハ乃  
庭く連方ありハ庭  
初朽を始ハ朽まは新武  
り乃くくあまは朽く  
ハ更よ不庭約り能子庭と  
面をりゆへに朽く子裁  
乃内朽庭有庭亦同し源  
成さりは今の事よ激景  
金をばは子裁くく  
又法乃ハ六帝のあへ軍乃

おん是もハ庭乃おそりハ  
あへんまりのあも是も  
白神庭のなま乃庭三君  
内ふる庭くは庭は庭と  
乃おそは面を始くは庭と  
教よよむ耐いあもは庭  
とこく人字あれた不庭  
庭より庭も庭乃庭く庭  
庭三乃内くおは庭の庭  
庭より二句あは庭刑く  
あへん庭く庭く庭  
庭三乃内く庭刑庭と  
くくの湖乃く庭よハ  
庭と教よは庭刑く庭と  
庭と

庭火

新来の名を新かし  
冬にしろくも人の名を  
月よとておぼえぬけとわを  
ふらりしおがえけの初かよ  
わらひのまきもそと新紙り  
も成におりけよたぐ火を  
わをゆへし庭火の庭乃  
おしりしわをゆへし燦火を  
くまを庭乃おとの月よ月家  
火場のまよとのうらわめゆ  
ひ庭う先よのうらわめゆ  
庭乃んるけまよとてお紙と  
はこしとて庭火の居所り  
もわらひゆし

庭のほろ

連ふれぬく  
山歌一二句

さうしぬし

ふんたつ

庭乃たまり水  
し君なり一ニ

白まのまよし二句と  
枝よありおとらととと  
又まあるおとらととと  
みましひ庭うまるとれ  
と憲法乃る理たうし  
ていの庭乃月しと庭者  
と庭りしとらとらとら  
と庭りしとらとらとら  
と庭りしとらとらとら  
と庭りしとらとらとら

庭

てい君を庭と又まま  
庭も君を庭と又まま  
書きててい君を庭と又まま

と能もとのいふまゝは清の  
いふは物もはてしなく  
と能よ教のりしむ時を  
いふく不極らむうと湯の  
字のき教のよふらんくもよ  
んよ清くくもたのり物よ  
もへりし寸あくびらむの  
湯の一坐よふりし一と一  
望二をを池よ六教よ清  
て又一もへりし人家は清  
乃まへをふもへりし事  
もへりしをへりし事  
下女もへりし事  
ふしと向乃思しふい居お  
りるゆへ湯町居おるり  
的むね撲のしおし清ん

と能もとのいふまゝは清の  
いふは物もはてしなく  
と能よ教のりしむ時を  
いふく不極らむうと湯の  
字のき教のよふらんくもよ  
んよ清くくもたのり物よ  
もへりし寸あくびらむの  
湯の一坐よふりし一と一  
望二をを池よ六教よ清  
て又一もへりし人家は清  
乃まへをふもへりし事  
もへりしをへりし事  
下女もへりし事  
ふしと向乃思しふい居お  
りるゆへ湯町居おるり  
的むね撲のしおし清ん

鶏を 和名一鳥の新一  
引合二と能くく池湯よん

はかに教のよ清く鶏直  
鶏鳴るよ鶏鶏和乃  
教おりりよ今一あれを  
よとよ鶏も教ふたり  
わく清くもくりもく  
うまよまふしむら物より



おん  
贊

生教は二句を以て贊と  
す。其の意は、神祇の

生るるを以て、  
とらふ事あり、若くは

のふく、  
服赤の誓りとす。其

まを以て、  
其の誓りとす。其

ふかき誓いとす。其

あまの誓いとす。其

乃乃の誓いとす。其

と誓ふ事あり。其

ふくむ事あり。其

あまの誓いとす。其

あまの誓いとす。其

あま

難に深業も難に難

あま

二句を以て、  
二句を以て、

二句を以て、  
二句を以て、

二句を以て、  
二句を以て、

二句を以て、  
二句を以て、

二句を以て、  
二句を以て、

二句を以て、  
二句を以て、

二句を以て、  
二句を以て、

あまの誓いとす

あまの誓いとす

あまの誓いとす

あまの誓いとす

あまの誓いとす

あまの誓いとす

あまの誓いとす

あまの誓いとす

あまの誓いとす

あまの誓いとす

あまの誓いとす

ゆを物乃花

あつ面よりきん  
揚揚しせき

如ひ遊よせ句まへに

似物乃歌

物を始とれ  
も面よりへ

あつ一多へしを物と

とつた和む乃富る

うらよるるに地唯之遊

し七句まへ

綿

あ葉付る句より  
綿も赤文をせり

てつとを茶紅葉場

をて物新式よまへ

を氏名宗通乃條

りやうにまへり付合

るりし付白よるる

まあおあまふ葉

山吹はまへり花

皆同じさるる人

小あつ原さん

ゆへふたをた

をてはまへり

松とくけしむ

あつまき

とまへり

あつて

付る乃

よらり

うらま

付ぬと

なま

さかきうしの袖を吟味し  
て花の葉も紙の糸の付合  
よせしめしむし好よたふと  
いれし家一もあつた合  
しつゝささし家一

あつた合  
あつた合

あつた合

あつた合  
あつた合

あつた合

あつた合  
あつた合

あつた合

あつた合

あつた合

# 保

あつた合

あつた合

あつた合

あつた合





為りて作らるるをたれりし  
居るに神ありしはく河も作し  
極極し

星月也

此日月乃字より三句  
去し日より三句し但  
名は乃名ありしは神より  
はく此はよもあつと転か  
うもあつ

星成らるる

去し天象に  
転かし初時  
去し天象の事なり  
ゆ事ふらう

星

月日ともい三句去し日次  
乃日月次星月より三句  
連より三句乃極の遊より三句  
被し極の月日より三句

わ

去し転か

わ

とらわ名は  
わすはのわ

わ

あめのわ  
ふ河百約

二とらわを遊  
すらわを遊  
かのり一かのり  
わを遊  
弘乃家  
二月十九日  
とらわは

海

へん字

聖なる山を色帯色  
昔も色帯色を色帯に

あつりあつり二百まじ

へて

年をへてふまのつれ  
糸を色帯にふまのつれ  
ねを色帯にふまのつれ  
あつり

虎

虎 子向小くへへ一のつれ  
こいふ小能得るなりとこ  
一産し二のまへへとこ  
あつり連と能とのつり  
あつりつりの物小付とこ  
連よわの事とをわしつれ  
乃されし海への虎も亦  
寅乃年寅乃日寅の時

くへへ初虎人なりぬのお  
虎大虎のくへへ虎も  
あつり虎の尾の虎  
猫さの獣さの虎今  
まへへ虎乃皮虎豹と  
そつ虎物竹虎肉虎膽  
さの敷の生敷の虎一の  
か

床

床 物も物さし但非物さ  
とのみ能得るまのつれ  
小のわく寸連さのつれ  
乃床と名の敷乃床と二の  
とも能得るまのつれ  
に一まのつれ一産し  
白とへへ玉床と物さの

ても三句の内し居るを寝よ  
 一む時しと一はゆつたひり  
 一入さやうまされし寝かると  
 乃う寝し又又者よ去にむ床  
 下吟床下るとある居る  
 一三句しをも寝かると  
 わる次皆三句乃内と又産安  
 のゆりの間床を寝る床乃元  
 床の無物床柱床らんる  
 と一人者寝たありありされ  
 寝かよあるはなう一寝も  
 皆三句の内し寝乃床あり  
 し居る寝かよある次但句神  
 小う寝る床之乃内し  
 網代乃床あり寝し寝かると  
 居るよ三句をこも寝る二

句し床三乃内し寝ゆの乃  
 床居るし寝かにはう寸床  
 三乃内し寝る乃床居るし  
 寝かにはう寸あましとせ  
 見えのまうきん床らんる  
 是の面をほあぬらう寝  
 とも是の床とまぬあましも  
 床との内し又三句の寝  
 をぬるしと寝るありとも  
 三乃内し三句の寝  
 又床の床乃まよあう寸寝  
 乃まよまうけし各別乃らひし  
 寝るまよのまよはあの寝  
 といふも床三乃内し居るよ  
 二句し寝かす床の山床居る  
 備るまよの名も乃床の床の



又と理よのされし能得のや  
ほとくしおれにわく寸を焼  
も此書かきまか刺心刺巻  
子所より灯は書かしたる火  
の書かされしもあつとすれ  
おれにわく寸と紫紐染ハ  
灯の字不のぬり一箇のあし  
と被た灯よ面を燈燭燈を  
燭ハ箇の内と蠟燭四乃内と  
書かかし燭の字とくし  
と續あり

いさ

友の杖床をよと  
ふことくしひこの  
あし照射ととくしひこの  
書よとくしと被くも中  
字派の中よ結ハ入とくし

燈三句乃内成るくか  
同あり

鳥

あつとくし一水鳥村を  
お乃るよ一を歎といひ  
て一将湯乃をうとくし  
おのよハ各々の事なり  
右新式より一燈四句の物乃  
燈屋よりい回乃をハ各々の  
鳥之継得よりいハ入り一鳥  
類花をさくく書よと續く  
も一燈六句と及去面乃を  
書されし後おしむまを  
あつとくし又後よりしむと續よ  
よじも此よ面を燈と新式  
小得湯の鳥とくしハ維よと  
うとくし乃をハ各々の書

い籍かゝりたるをいふは違ふとも  
乞ふに諸君の意を察するに  
各々ののりしとらあるをり  
るをいふは「維野」  
うけるとの「功」の名を付す  
もくは「一」くす又ひまも  
うかをいふをさすといふも乃  
まのなり乃をいふをさされ  
し能治す「二」句をさすを  
最ハ物生敷「華」表とくけし  
る乃字よりも名乃字よりも  
二句をさすの「の」をいふも  
名乃字より「二」句をいふ  
ハ二句をさすも「獸」といふ  
うけし二句をさすも「子」  
細くさすも「二」句をさす

よりかゝるの面をさすも  
云々披よあき花程と名を  
乃款の「一」くすも「宿」  
たの乃字をさすも「の」  
ぬる秘あるも「同」の字を  
乃秘る「眼」の字をいふも  
名「の」の「と」の字をいふも  
同く「生」の字の「名」を  
し「生」の字の「名」を  
ぬるも「窠」の字をいふも  
無名の「名」をいふも  
人「名」の「名」をいふも  
も「名」の「名」をいふも  
乃肉をいふも「後」の字を  
生敷よあき「子」の字を  
二句をさすも「二」句を

辨解 せんげつ まるくこれそれし作  
夫のゆめ次第し地乃をあら  
し難きとくす寸とくすのち

戸字

とく 戸字 せいのめ 戸字

るす 形式めび曰のれ物とす  
能得よ又戸乃字を教なり  
よそしても又曰の物と知个  
吾を教云又戸の戸字を  
あし次各条のれ事とあきし  
得と者亦よあしと戸を  
戸乃肉よあし次といとく  
室の戸も戸亦よあし寸  
それをも曰乃亦よあし寸  
や戸字を又戸も能よ  
又戸字といとく 誤字あれ

と戸曰の亦と連なり  
さりあしと戸亦よ二句と得  
里を得し亦の字ありと  
て戸の亦よと戸あり  
形式の戸乃字乃下小樞  
冥戸音ナリと書せわとが  
そとひのり戸一ひ三戸  
倉の物なることと戸一計  
と曰句の亦あり 戸亦よ  
も二句とくすのち後人  
誤字を教あり 屋乃字より  
ひしひの誤の字あきしこの  
ろく物とくすのちとくす  
と戸一と亦乃物よめら  
形式乃んを教し戸人欲  
能得よと戸一も又乃戸



乃内居所もあつたは  
 場へさそり水戸川戸  
 戸不も門乃字又海乃字  
 も出ゆへり又の戸れあ  
 戸乃字も二の去る戸  
 云枚戸は書戸所と  
 いは違ふも面紙通と  
 大を所誤とてに新式  
 をと替へし折越を  
 物乃内室よ戸と入  
 りに新式乃字の  
 は字かとせむ宿未  
 ら紙を場へり  
 は字と文内よ  
 と通とのよ  
 居所とのよ

戸折越を場へり  
 ま次書と戸前  
 物とと所物  
 よあり合の  
 戸とと戸  
 むと戸  
 字も  
 八種紙  
 戸乃内  
 字よ  
 戸を  
 付の  
 戸と  
 く戸  
 戸を  
 おあ

あまのしん 秦の何房(あまのむら)ちたり  
さゆへ酒の月(つき)ていさほ殿(とね)  
おろき事(こと)あつらさるにあり  
上のさひらの肉(にく)は香(か)もつか  
酒のさびさしてふくまのさ  
つらり徳(とく)は目(め)にへりあり  
書(か)乃(の)肉(にく)はし事(こと)かんすとい  
るり道(みち)まはす下(した)に唐(たう)よりく  
酒(さけ)のむものをい大(おほ)靈(たま)といふ  
物(もの)乃(の)かよもよふとくはま  
いふさこんあつら次(つぎ)とつり  
ゆしそれさともあましくこと  
あれ若(わか)より目(め)にへりひつり  
酒(さけ)されも酒(さけ)吾(われ)人をよふは  
さほのび人を中(なかつ)戸(と)えの月(つき)  
ぬものをもとす戸(と)のひつり  
飛(と)遊(ゆう)りともさかたなり  
あまのしん 秦(しん)の何(なん)房(ぼう)ちたり  
よもあつらさるにあり  
もらゆしつらへり  
たもつらまは漢(かん)戸(と)乃(の)字(じ)の  
さゆへ酒(さけ)の月(つき)ていさほ殿(とね)  
おろき事(こと)あつらさるにあり  
上のさひらの肉(にく)は香(か)もつか  
酒(さけ)のさびさしてふくまのさ  
つらり徳(とく)は目(め)にへりあり  
書(か)乃(の)肉(にく)はし事(こと)かんすとい  
るり道(みち)まはす下(した)に唐(たう)よりく  
酒(さけ)のむものをい大(おほ)靈(たま)といふ  
物(もの)乃(の)かよもよふとくはま  
いふさこんあつら次(つぎ)とつり  
ゆしそれさともあましくこと  
あれ若(わか)より目(め)にへりひつり  
酒(さけ)されも酒(さけ)吾(われ)人をよふは  
さほのび人を中(なかつ)戸(と)えの月(つき)  
ぬものをもとす戸(と)のひつり

鳥(とり)と乃(の)字(じ)乃(の)字(じ) 連(れん)は面(めん)

誰(たれ)ふは七(しち)乃(の)字(じ)をい徳(とく)乃(の)字(じ)なる  
くよ乃(の)字(じ)なることりぬ教(しよ)

鳥のくさ 種乃らなるこ  
あしむと物と  
連よあり船も同

鳥の好風 風神の風神よ  
二句まじ鳥の

好少の二句の鳥乃好くさ  
あしむ好風神

鳥の巢 鳥の古巢も鳥  
さえはりの鳥まじ

鳥の屋 鳥のう二句の鳥  
あしむ二句の鳥

鳥も藤もゆくとさるん  
二句の非まじ鳥まじ  
とらふはゆり物あし

鳥の神 鳥の神のあし  
難し三條の神

鳥の神のあし 鳥の神のあし  
あしむ二句の鳥

鳥の神のあし 鳥の神のあし  
あしむ二句の鳥

鳥の神のあし 鳥の神のあし  
あしむ二句の鳥

鳥の神のあし 鳥の神のあし  
あしむ二句の鳥

鳥の神のあし 鳥の神のあし  
あしむ二句の鳥

鳥の神のあし 鳥の神のあし  
あしむ二句の鳥

鳥の神のあし 鳥の神のあし  
あしむ二句の鳥

鳥の神のあし 鳥の神のあし  
あしむ二句の鳥

と始く大神をへるも人な  
神らあるり又神は言ふま  
とらりも神も難しき物乃  
言ふまとも神らも言ふま  
とらりも神らも言ふま  
天下の地下人正月は親類  
とも振舞ふ事なり言ふま  
まれも不度言ふまも言ふ

いよのいりりき

いよのいりりき  
いよのいりりき

大嘗年乃時あるは襖のぬ  
らり

いよのいりりき  
いよのいりりき

いよのいりりき  
いよのいりりき

いよのいりりき  
いよのいりりき

いよのいりりき  
いよのいりりき

いよのいりりき  
いよのいりりき

いよのいりりき  
いよのいりりき

いよのいりりき  
いよのいりりき

るる回さし

年々

とらふりまらさ  
ま乃津日さし

うの改よ改年とちね

よ勿海まき二とせ三と飛

甲とせぬとせともわらぬ

とらふまらふ人し皆當年乃

るゆふぬとまよらうし能

句神うしなをう

をさ里小所

振列の品  
あし居るま

二句始ふ

と乃ぬと所

とらふあせし  
あし居るま

り二句飲

女

あし一多の歎ふとに一月  
花をまふあし人備乃

ともよれをさう極らと云後

あせえ又一あらう能うし

人備あとも月花あとも

るあまもあとりあ字わ

あし流ゆうとわうと勢あ

よよとまひ甲乃肉し

とと色縄

女乃字よあし  
あのかとと小付ら

縄たり又ささこは付らさい入

縄とらああよらうとあ女

あし女乃さあし

泊船

あしあしあしあしあしあし  
あしあしあしあしあしあし

と海り

い流くのう海りあ  
あしあしあしあしあしあし



鳥の久の家 まゝり三月

乃右巢 乃末り

日の暮 福

色 の白し

いこよ乃花 橋

此 乃

被 乃

去乃 乃

とこ 乃

乃木 乃

年 乃

能 乃

子

一の 乃

乃 乃

子鳥 乃

と 乃

子 乃

乃 乃

乃 乃





細乃七百三十九物をさのり  
竹田の舟路とよありしと  
新式よりしててもまの  
うさうひうわらんやぶ宗御  
連歌道ふり人丸小あそ  
宗紙乃ありあそつれ一人  
あつれし連よ六七句能り  
又句ま

路と乃のる 連よ六八句  
まのれし能

よ六八句まのれし能  
と乃の道るまのれし能  
ふあつれし能  
路中へ路ありとつれし能  
まのれし能  
よ六七句能り

雪路を流路といふ  
ゆきまのり流路といふ  
流路よ乃のり打紙を  
あそつれし能  
人るまのりか  
風月日まのり通事  
よも雪のがひち  
まのり  
まのり

路小 昔比まのり  
但路乃心よ用

白あつれし能  
まのり

ちまのり道 二句ま

穀乃字

穀乃六三句云々  
但先乃ちりり

紅葉本乃葉ホのちり連よ  
朽を婦人し能よ六面と為  
らり

第れ字

形或よりはるまじ  
云々よ一唐一白の

袖乃唐うたのきり家信判  
小たり寸能よ六朽よ一法く  
多し第屋と穀よ清く  
も田肉るり

契よた乃り

白神より  
て同云々

成よあじとらりハ不審  
利

里ちれ志く人

林し能く  
呂乃後云

小成るさ道理なれとその  
所法るけりて呂乃字ハ難  
あ〜く云々

里うたん

里んあうたのこ  
林よあハ弟説

説多なれと定家乃所説よ  
里んあうとわれし朽を婦  
人

想

ぬぬ

但不のぬと切乃り  
打紙よてハ不審

之由云々新部よく〜ハ  
不のぬる〜ふのぬ〜





布ハタハハタハハタ

おろおろおろ

もハタもハタもハタ

ぬハタぬハタぬハタ

おろおろおろ

二句ハタハハタハハタ

ぬハタん

おろおろおろ

句ハタハハタハハタ

句ハタハハタハハタ

ハハタハハタハハタ

ハハタハハタハハタ

ぬ

ぬハタのハタぬハタぬハタ

ぬハタぬハタぬハタ

ぬハタぬハタぬハタ

ぬハタぬハタぬハタ

ぬハタぬハタぬハタ

ぬハタぬハタぬハタ

ぬハタぬハタぬハタ

ぬハタぬハタぬハタ

ぬハタぬハタぬハタ

ぬハタぬハタぬハタ

ぬハタぬハタぬハタ

ぬハタぬハタぬハタ

ぬハタぬハタぬハタ

ぬハタぬハタぬハタ

ぬ

女言の記

只一能辨りし

女らうしとて發

おつひとてわをうへ今一句  
多へいほ連も女乃言よ  
いねを可辨ん又男も今  
とらふ事むありあ終も女  
言記二句乃同するへ

鬼

新武お屋二句の言よ

おせりといふを百約也

よふて度子句よ二句乃福し  
連ふあういむと我始あし  
能辨ひもよ是と兼や同  
物を宗とす連と百約よ  
鬼とも鬼辨とも二句あり  
てねを久鬼ゆり鬼あさ  
とらふと今一もへ鬼ら

生熟りもあし鬼辨と  
いひと辨祇もあし又  
魚をともむり鬼乃と  
りありありき鬼乃言よ  
あし小兒と去し小兒  
原の家りうりも辨ん  
小兒と去し人偏の婦人  
うし寸鬼屋のいも二乃用  
いほ言もねをうへと

女

をうあといひも品て

子句よ二句の物され能  
とらふも二の言へく女房  
女性よく發といひも多  
うし寸し女め乃とらふと同  
字を辨れあといひく女よ  
面を場へく女言む人偏

あゝ福もねらうくもほほ  
あゝ女を百約きつゝあよきぬ  
いふは建歌よ八倍くもあつて  
を思ふもいづれかおの建歌  
乃心物と裏面のいづれか  
いづれか思ひもいづれか  
年おらふ事とも男のあつて  
あつて女をのめらひいれ  
あゝあゝあゝあゝあゝ  
いづれか思ひもいづれか  
寸人を真よいづれか  
せん為乃粒句もいづれか  
いづれか一句の物もいづれか  
きこるあゝあゝあゝあゝ  
いづれか思ひもいづれか  
乃心人傳りあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝ

年日

いづれか思ひもいづれか  
いづれか思ひもいづれか  
いづれか思ひもいづれか  
いづれか思ひもいづれか  
いづれか思ひもいづれか  
いづれか思ひもいづれか  
いづれか思ひもいづれか  
いづれか思ひもいづれか  
いづれか思ひもいづれか  
いづれか思ひもいづれか

思

いづれか思ひもいづれか  
いづれか思ひもいづれか  
いづれか思ひもいづれか  
いづれか思ひもいづれか  
いづれか思ひもいづれか  
いづれか思ひもいづれか  
いづれか思ひもいづれか  
いづれか思ひもいづれか  
いづれか思ひもいづれか  
いづれか思ひもいづれか



















りりあめ まきし

りりあ まきし

りり葉 まきし

りり葉 まきし

りり葉 まきし

りり葉 まきし

りり葉 まきし

りり葉 まきし

りり葉 まきし

りり葉 まきし

りり川 まきし

りり葉 まきし

りり葉 まきし

りり葉 まきし





た乃さのの羅こころと  
めんち付くもく家  
物守磨たこころめん  
きこころめんと  
たし物とまを同端  
もめん同字とるに付  
く物か守とるめ  
誓乃端お似わ  
まこの類よ似ま  
又系おしわをわ  
めんと名流く  
各系乃物とるり  
日おま  
子

加

乃乃字

約よと  
いふとく今一あり懐  
とくくと新式よ  
いの中も連乃  
まるま  
句を成

杜

連乃  
乃乃  
連乃  
乃乃  
下句  
し他  
あや



去物乃内クんと考ルよ續  
 多う句今一入くつと曰乃  
 物は既致居ると秋越海よ  
 所くくくくくぬをともまう人  
 月所をなともくつ乃きよ  
 物花をなよよあせく連  
 洲よのまふ成し秋うんを  
 後りよのあうりもも秋う  
 るりうりのあう乃ともまよ  
 成しあうりの冬うく秋乃も  
 多くとりり皆句神より  
 去物へくくくくくくく  
 月り神くくくくくくく  
 秋乃老翁よあうくくくく  
 るうあをぬるもは字乃出皆  
 秋は乃倍秋よらうくくく  
 く生類ふもくくくくく  
 曰乃外し乃陳秋く生類  
 誇よ書く乃乃ハ生類  
 わく寸句神ふくわくく秋  
 乃まよのまのり乃腹ま  
 物ひくくくくくくく  
 多一類ふれく曰乃肉く  
 心物を始く乃肉くくく  
 くとくくわの秋まくくく  
 くくくくくくくくく  
 のゆらる類ゆらるを始  
 者ふふのあうくくく  
 右くく乃肉くく又右あはら  
 乃くくくくくくくく  
 いたふのあう寸鴨乃事と  
 多く乃よ子をのな秋くく

林あり

恒

二恒恒のりまゝまゝの  
くまゝ恒二乃内成るゝと  
何ふの端難とくけし海  
くまゝ小形を始へさゆされ  
其恒とくあへ二乃内成へ  
恒よの恒くさか恒恒まゝと  
つひくゝとまゝへ恒くま  
とまゝのりまゝまゝ恒か  
く恒のりまゝまゝのりまゝ  
くまゝのりまゝ恒と難面と  
のりまゝ恒と虎落の七句  
まゝのりまゝ恒のりまゝのりまゝ  
七句くゝあふのりまゝ二句  
恒をくゝまゝ恒のりまゝ二句  
弟の本と露の恒乃くあふ  
恒のりまゝのりまゝ恒のりまゝ  
二句まゝまゝ恒のりまゝ  
人若人まゝあふまゝまゝ  
あふまゝまゝとゆゝのりまゝ  
とまゝ恒乃まゝとけまゝ恒  
あゝ恒よ面を恒のりまゝ七  
句まゝ恒のりまゝのりまゝ  
二句まゝ恒のりまゝ

神

一神代一各神一のりまゝ  
まゝまゝも能恒よのりまゝ  
恒神と各神まゝまゝ  
まゝ恒まゝ今一のりまゝ  
各神恒まゝと新恒まゝ  
あふまゝのりまゝ恒のりまゝ  
恒のりまゝ恒のりまゝ  
恒のりまゝ恒のりまゝ





とあきし能く六面を  
るしは穢り紅葉より  
歎をうけり六あし寸  
花の葉をよめり事  
と得回乃あしき  
見紅葉入ん事  
鳥の歎をうけり  
あり句ありし  
さるくハ又  
まし二句  
月影をよめり  
小八不審あり  
産乃家道乃二句  
よりさしと  
くし  
死ハ  
ま  
衣  
る  
小  
よ  
あ  
常  
衣  
る  
く  
乃  
う  
ら  
と  
わ  
物

ま  
衣  
る  
小  
よ  
あ  
常  
衣  
る  
く  
乃  
う  
ら  
と  
わ  
物







久々の白くもくく  
式目より白く物のれも  
を代はるよ三句はく  
と能くく白くもく  
懸乃若くくくく  
めいもくの種二ま

### 種り寸じ

し中はくく  
くすじ晩種のもく  
物倉のくく  
種り寸じ  
と色乃若く  
くく式りも  
あくく  
乃きく  
くく

くく  
てもく  
く時ふよ  
目く  
く種よ金  
種らく  
結網  
くく  
く種乃  
種よ面  
目乃  
種く  
目乃  
寸めく

く孫同お針く孫同お頸く  
孫同お入之のく孫同お齒よ  
付るく孫同おおくく付  
てもく孫同おくく付  
く船火若くくもくく  
くもくく付くくもくく  
く六月乃吳名お林鐘とあ  
おをいほの付くく  
鐘乃をよを鐘おすくく  
乃く孫とま歌よもく人  
まかたる孫同おく物知  
人名くく

震お あり方二句きくぬ  
るり

震乃衣 衣敷よあり付衣  
乃衣よあり付衣

震の綱 多也よあり付衣  
すのあり付衣  
あり付衣

震くいん物よ二句き

震乃音 山城乃名取  
不吉の伝る

ひさきくありありあり

震の海 多いさ物るり  
北ありあり

震の洞 地境なるく流  
乃流なるも

るり白ふくくく  
るくたよまよあり



きも同あ

くいひふもあつて

いひふもあつて  
同あ

楓 秋にきくても同あ  
紅葉ふれを始とあは

眺ふ西を始とあは

河名乃魚 ありと澄物  
小二句魚一六

七句きし

無植 ありと無乃字は  
二句名乃字あり

あり

葛城 山とあ字は  
山敷あり

美日奈 二月と申日  
十一月はあは

初の奈を正とあは  
美し

美日ふ いく日あり

乃字あり

袂奈 ありとあは  
月はあはれ

ありとあはれ

ありとあはれ

菅田 ありとあは

極物ありとあは  
まきとあは









ありてはらんわうらんあまし  
 生類しは雲を秋津とらふ  
 し目かど始は鳴とるあく  
 ぶ事ハ東國南少へいりく  
 西必南少へもわくもへい  
 び雲乃くしらを長へ向く  
 色を坤へるしとあり屋  
 を内國とれし秋津鳴と  
 尸くさふまらわく東と  
 出り皇野庭も秋津もらん  
 ぶも鳴くまらふ事名まれ  
 と難しは雲をまらふあ  
 りふらんわうハねうすく  
 ねはくひう流くもわく一  
 まぬあらんくともくし  
 人名目よらん守陽忠の  
 おくともろねくさのりいり  
 てまらねうまらふらふ  
 ふも流流くあゆりくまら  
 乃くしと尸ハ野庭へく岩  
 かのくたご海つものし又  
 石尖くく石らんらんお火  
 乃光名もろねくさあへま  
 ともろ物われもとり合て  
 ろふ乃石乃火名光ともい  
 けく来たたる詞あり又和  
 列よ秋津野うけらふ乃小  
 野とくみはふま一は二  
 東野とくみはふま一は二  
 とのくりあふくま流あ  
 毛もくしとくしとふ名を

人名目よらん守陽忠の  
 おくともろねくさのりいり  
 てまらねうまらふらふ  
 ふも流流くあゆりくまら  
 乃くしと尸ハ野庭へく岩  
 かのくたご海つものし又  
 石尖くく石らんらんお火  
 乃光名もろねくさあへま  
 ともろ物われもとり合て  
 ろふ乃石乃火名光ともい  
 けく来たたる詞あり又和  
 列よ秋津野うけらふ乃小  
 野とくみはふま一は二  
 東野とくみはふま一は二  
 とのくりあふくま流あ  
 毛もくしとくしとふ名を

あひ合をわくし一はとみく  
ふりあふ終る名は乃時と  
生類しあふは從をうふ  
乃小野よもゆらとつあ相  
を結しま成るう一花乃字  
飛越るうへあふと秋津  
野もくまらうふ乃小野もま  
勢り二万まをうきそつを  
らふとま秋津じんわ此男  
にま物なをくくく名前の名  
鶴野と勢入讀くく又のあ次  
能くまらうふと秋津とあふ  
まもや鶴野とまふへん  
名前の名もらわの可も次  
それもけらあくあふハ物  
付野とくハはとあふ

くけら乃小野とつひえと  
とく一ねりうをうよハ物  
るうらまは次まを姓の家通  
まらうらまはまこともの

鷓 雜し水をもハ皆まをり  
るはたい名の鷓野もま

とま小まらまはいそれと  
之の道乃秋なりまはゆへよ  
まよまらまは次新式よ雜  
小まらまはあふく若れ連  
ま野ハまま乃まらまら  
ま家まらまへくもめ連よ  
まれは能よハ今一うも先  
まり又白鷓まらまら  
まらまらまらまら人の名  
まらまらまらまらまら



付くはらふしうすうらこ  
しうすうらふしうらぬ衣敷  
ふわすす

### 袷糸の名は甚

准繪物  
秋乃衣

よの不可不用之袷乃衣と可  
わかなし新式法よりなむら  
るもよひうらものよさうす  
物といふしうら物乃さうす  
し生製よりあつぬしうら  
し法よりくさのよさうす  
しうら物乃さうす  
乃名なれし名よさうす  
連うもさうすしうら  
く袷のよさうす  
三白乃物と名なれし  
い法もさうす

### うらひるしうら

北産  
字也

しうらの法はさうす  
うらひるしうら  
新式めいけい  
ふもまのよさうす  
はさうす  
うらひるしうら  
えさうす



痛瘦痛ふくはも傷を  
とくも難く事同くま  
執痛志法傷多しとみそ  
器も家より中ゆるり乃  
冬よとあつさゆらぎのさき  
むじまゆらぎと二白まへ  
客の字より西成好くへ  
九地准く

碩 二白まへ  
二白まへ

風とく 二白まへ

葛城 とつりも山敷く

ふつりも字にえと二白まへ

のりもあつさゆらぎのさき  
とくも難く事同くま  
執痛志法傷多しとみそ

壩井 名ふく水もく  
又おく生敷くあつさ

河舟 旅よあつさ川の川  
舟はあつさゆらぎのさき

小舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟  
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

貝 虫敷く生敷くあつさ  
色もあつさゆらぎのさき

貝のくもあつさゆらぎのさき  
色もあつさゆらぎのさき





乃く居るよあうさうせん  
乃字も同あうさうせん  
首途さうさうあうさうせん  
連のあうさう門よ面をさう  
え居るよあうさう連よ一  
句の袖をさうさう連よ句の  
あけりさうさう門のさうさう  
久さうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさう  
門のさうさうさうさうさう  
乃さうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさう  
様のさうさうさうさうさう  
神よさうさうさうさう

くさう  
林さうさうさうさう  
林さうさうさうさう

乃教よあうさうさうさう  
もさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさう  
不知割の字さうさうさう  
さうさうさうさうさう  
物合をさうさうさう

るさう  
連さうさうさう  
さうさう

さうさう  
連さうさうさう  
さうさう

さうさう  
さうさう

さうさう  
さうさう

さうさう  
さうさう

くくくくくくく

くくくくくくく 種物しをく

るる種 ありぬくくくくめ  
お乃能乃字回面

をぬく

るる種く物おの ありぬく

くくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくく

印 連よぬくぬくぬくぬく

くくくくくくくくくくくく

かききの橋 生敷おきく

くくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくく

髪と顔とく 眉のね

くくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくく

乃く眉髪赤の敷いあき  
乃物うちにはり白のほを  
うらわあきし付くわさ  
昔しうあへくはきく  
白乃はちを屋うあうら  
理不尽う付へくはき  
らきく

風小 髪ふ風木指一切乃  
風乃まのほあふ白き

こ萩乃髪はけのそよ  
くさりく色のそあきま  
風よ二句きし

うら 花本草の枝あ  
とわうはあふ

らんらうとあ髪よまの女  
乃通うまうさしは二句  
るうらうの端を端あ  
ふまのそまうらうに  
衣敷うあ守

え 三粒ありああの備  
うらうえうら

ひとよあうの斤扱こる  
涼さ風とよあうの二句  
をまうらうあうら  
うらうらうらうら  
人あうらうらうら  
ようらうらうら  
得る二句あうら  
うらうらうらうら  
家あうらうらうら

ふ 片付くもく付く  
くく付くくくくくもく  
もくばきま物のはわらぬ  
く片の文はひかふるれも  
くももんもひかふる物者  
一對わらぬあくるくくく  
といふはやま母ま付白  
の場へく付くはくく二片  
ま成るくくは乃字に  
くぬくくぬくくく片者  
燦片時乃板乃物れく  
くくくくくく乃字  
くくくく付くもく付く  
くくくく付

くくくくく付 片者

片乃字ま三句はれ字ま  
は付白物く

くくくくく 片とくくま二

白物くくくま丸おとく  
くく書くくくくくく  
くくくくくくくくく  
わやまらま物れ共その  
くくくくくくくくく  
おわくく物るりねま乃  
凡ま乃あまらるれく  
くくくくくくくくく  
くくくくくくくくく  
くくくくくくくくく  
くくくくくくくくく  
くくくくくくくくく



字ハ二句キハ

うゑうゑうゑうゑうゑ

縁とも排ハ定まらぬ

うね 縁句の布ナリ縁ハ

今一句を付し句のやめ

連能をう一回

難よ くて西を極流らる

句まきし色ハ新式ナリ

物合しうやう老くろふ

まををねをさううい

よ何句乃相と縁ハ

新式よまねうろ又定ま

うろろろろろろろろ

うね 連ハ二句わね

一悲歎悲源とや

うふひやうん

句ナリゆきあき

うろろろろろろろ

かき

うさうひのう二句  
まゝそれらあゝぬ  
うさうり花う乃数し

かきね字

むしうく教くあやこ  
う洞付句もむあひ

もきううそひうやうのまき  
乃洞付を久句のあけを  
久く二はくまき

くさ

とう洞人編者  
とあく乃るあへ

しある雪うみとあくふあ  
し寸如し春ふあうんあ  
ひとま云し糸を代乃連  
う神の極事う海く  
あうくいとれあうと人  
あふまとあうくうけあ

乃くうあまそれと連  
よる乃くうさ袖乃くうさ  
さると人あうよのまあ

付くはあ物乃く人よああぬ  
洞とぬとあひあうく物  
乃人よひくさうせうあう  
あまあうり僻あまし文道

のひらうあ洞のまうあひ  
くひをうしうあうあうり  
るんそあううあ洞よこり  
とくうあうとて人あうあ

こいよまあゆあううさの  
こいこい結吟味しこい  
あまこくへうあうとあう  
麻のくうさあああああ

あ海といとんうああの料  
あ海といとんうああ





入冬ノ成ノ事ノ具白御  
候

建ノ為ノ首ノ乃葉

るこひんくもくもく  
藤葉の事なり



